

## 中世王朝物語における「不義の子」の処遇：『在明の別』を手掛かりとして

宮崎，裕子  
国立国会図書館非常勤職員

<https://doi.org/10.15017/8908>

---

出版情報：語文研究. 100/101, pp.76-93, 2006-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：



# 中世王朝物語における「不義の子」の処遇

——『在明の別』を手掛かりとして——

宮 崎 裕 子

—

『源氏物語』以降、『狭衣物語』、『夜の寢覚』、『浜松中納言物語』といった平安朝における代表的な中・長編物語には、密通とそれによって生まれる「不義の子」たちの姿が描かれた。その流れを承けて中世王朝物語にもこの題材が頻繁に用いられており、数多の男女の忍び逢いと「不義の子」たちの誕生は、中世王朝物語の特質の一つと言えるだろう。

そうした中世王朝物語群の中には、表向きの父に出生の秘密が露見しないまま、或いは露見しても容認され、「不義の子」が表向きの父の子供として遇され続けるという内容の作品が数編存在する。『在明の別』、『苔の衣』、『我身にたどる姫

君』、『風に紅葉』、『夢の通ひ路物語』がそうで、中でも『在明の別』は、男子のいない自家の後継者を獲得するために「不義の子」の誕生を歓迎するという一風変わった特徴を持つ。

しかし、「不義の子」が表向きの父の子として扱われるには一定の条件を備えている必要がある、子供の素性がいかなるものであっても構わないという訳ではない。一見乱脈に密通が行われ「不義の子」を誕生させているようではあるが、実は、密通によって生まれる子供・表向きの父・実父という三者の血縁関係には、ある規制が存在しているように思われる。本稿では、中世王朝物語における「不義の子」の処遇がどのような規制に基づいて行われているのかを、「不義の子」を積極的に求める『在明の別』を手掛かりに明らかにしたい。

まず、中世王朝物語に先行する平安朝期の物語に見える「不義の子」たちの有り様を整理してみると、子供の処遇に関しては父方の血統が重視される傾向にあり、密通によって生まれた子供たちの半数は父系に所属させられている。

『源氏物語』の冷泉帝は、実父が桐壺院の子といえ臣籍に下った光源氏であるのに即位し、薫は、その実父柏木が藤原氏出身であるにもかかわらず、最後まで光源氏の子供として遇された。二人とも、父系の血統の中に収められておらず、父方の血筋を偽られたがゆえに苦悩することになる。

中納言を実父とする二人の「不義の子」が生まれる『浜松中納言物語』では、それぞれの子供の扱われ方が異なっている。唐后が密かに出産した若君は、父である中納言が引き取り、日本へ連れ帰って養育。一方、中納言は、母方の叔父衛門督が通うようになった大弐女とも忍び逢い、大弐女が出産した男児を自分の子と知りつつも、叔父を憚って事實は秘す。中納言は衛門督のことを「近きゆかりの人」（巻第五 新編日本古典文学全集390頁）と言っており、『浜松中納言物語』は、それが母系を介した近親関係であっても、表向きは父と実父とが叔父と甥程の近い血縁関係にあるならば、「不

義の子」を表向きの父の子としても構わないという認識を持っているのであろうか。

『狭衣物語』の狭衣は、女二の宮との間に誕生した若宮を皇太后宮所生の皇子と偽ることに罪悪感を抱いていたが、自身の即位によって若宮は実際に「帝の御子」となり、若宮が皇統に連なることに血統上の問題はなくなる。<sup>(注1)</sup>

『夜の寝覚』では、寝覚の上と結婚した老閨白が、結婚後に生まれたまさこ君が実は内大臣の子供であると知りながらも、寝覚の上を咎めもせず、まさこ君を実子として遇したことが窺える。まさこ君の実父である内大臣は老閨白の兄の息子であり、老閨白・内大臣・まさこ君の三人は父方親族同士である。

では、これらの物語に多大な影響を受けて創り出された中世王朝物語において、密通の結果誕生した「不義の子」たちの処遇は、どのようになされたのか。手始めに、「不義の子」を手に入れて家を継がせる『在明の別』の事例を検証してみることにする。

## 三

『在明の別』は兄妹の入れ替わりを描いた『とりかへばや』

の発想を応用しており、主人公は男装の女性。男性として生活していた主人公は、妻対の上との間に左大臣・中宮という一男一女をもつけたことになっているのだが、実際には、左大臣は関白の、中宮は内大臣の子供であつた。

主人公が心ならずも男装させられた理由は、

をとゞのをとなび給まで、をとこ君むまれ給はで、つぎをはしますまじき世を、かしこきみちにもかんがえたてまつりけるを、いみじくおぼしなげきしあまり、さまぐの御いのりをし給しに、…神の御しるべしめしつげ給やうありければ、かく思のほかなる御さまに、みなしきこえ給てしなるべし。…(主人公八) 神の御しるべや、げにいみじかりけん、そゞろにみをかくすことなんをはする。

(巻一 鎌倉時代物語集成312頁)

と説明されている。主人公の父太政大臣には、家の後継者たるべき男子がいなかった。そこで、神示により、内親王腹の一人娘である主人公を男性として生活させることになつたといふのである。隠身の術を授かつていた主人公は、その力を用いて父方の叔父である関白の邸へ忍び込んだところ、関白が継娘対の上を身籠もらせたことを知り、悲嘆に暮れていた彼女を太政大臣家へと連れ出す。事情を知つた太政大臣は、

よとゞもに思つることは、これなりけりと、御むねあく

心ちして、いとゞしき御いのりをせさせ給。

(巻一 鎌倉時代物語集成325頁)

と喜び、やがて対の上が男児(後の「左大臣」)を出産すると、太政大臣家の人々は皆、念願が叶つたと満足する。

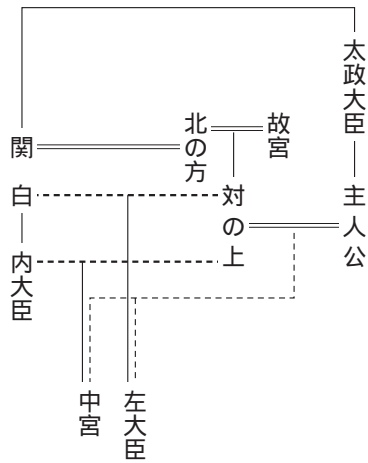
更に、関白の息子内大臣がかねてより執心していた対の上のもとに忍び入り、その結果、彼女が再び懐妊したところ、

主人公は、

右大将(主人公)の、御心ながらいとかたはらいたけれど、かゝる事など宮(母宮)にしのびて、「げに心づきなく、をこがましきことなれど、さりやいかゞせん、よひくごとのせきもりも、ゆるしなくこそは。いとゞすゑぐひろごり給はんはいと思やうなり」とおぼしゆるすかたしあれば、いみじくもてはやし給。

(巻一 鎌倉時代物語集成338頁)

と、家の繁栄にとつては良いことだと考え、咎めもせずにもてはやす。対の上がこの時に身籠もつた女兒が、後に中宮となる。



家の後嗣を得るために男装していた『在明の別』の主人公にとつて、対の上の密通とそれによる懐妊は、家の繁栄のために望ましいことであり、彼女と同じく男装して夫を演じる『今とりかへばや』の女君が、妻である四の君の密通を不愉快に感じるのとは対照的に、密通と「不義の子」の誕生は歓迎される。男装・女装の主人公兄妹がやがて入れ替わる『今とりかへばや』とは違い、入れ替わるべき兄弟が存在しない『在明の別』の場合、家の存続のためには、対の上の密通とそれによつて誕生する子供が必要だったのである。

この太政大臣家の画策については、神田龍身氏と西本寮子氏がそれぞれ正反対の解釈をされている。

『在明の別』は密通によつて生まれた子供であつてもその血統は問わず家のために利用するという考えのもと、「一人娘に男装させてまでして家ぐるみで意図的に子供狩りをするという一つの極北の風景をな」している、とされる神田氏は、

これは家がすべてに先行する父系制論理の当然の帰結であり、家が一人歩きしだして、いずれは血の否定に到るであつことはあらかた予想ができたというものなのである。血という実体ではなく、家という仮面こそが大事なのである、という評し方をここで是非ともしておきたい。(中略)

さらに、だとするならば、これは密通というモチーフの構造までもが大きく変質してきていることをも意味するのではなからうか。密通なるものは、他家の血の混入ということ、血を重視するところからモチーフとしての意味があつたと考えられるのだが、ここではたとえ不義の子であつたとしてもしかるべき家におさまりさえすればよいのであり、密通という事件のもつ衝撃度は著しく弱いものになつてしまふことは否めないのである。

〔「仮装することの快樂、もしくは父子の物語—鎌倉時代物語論—」、『物語文学、その解体—「源氏物語」—「宇治十帖」以降—〕、「有精堂、一九九二年」所収。初出は「鎌

倉時代物語論序説―仮装、もしくは父子の物語―』、『日本文学』三十五卷十二号、一九八六年)

と、家の存続のためにはたとえ他家の血を承けた子供であっても構わないという意識を持つて行われたのだと解釈された。これに対して、西本氏は、

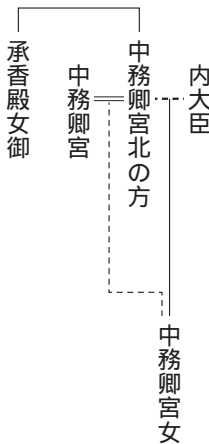
妊娠した対の上を見て太政大臣が思うのは「世とともに思ひつることはこれなりけり」であつた。これは後嗣問題に頭を悩ませていた太政大臣の長年の悩みが解消したことへの安堵の言葉だが、その安堵の中には、やがて生まれてくるであろう子の実の父親が我が弟という、血筋の確かさへの安堵もあつたのではないだろうか。他家の血の混入も家のためにはいとわない、ただ家の系譜の中におさまればいい、とはいつても、たとえば忠通が弟頼長を一旦養子にしたように、摂関家の体面は血の保証によつて守られていたという構図と同質のものだと思われる。同じことは対の上が生んだ中宮についてもいえる。内大臣の子という血の保証があつたからこそ、「いとど末末広がり給はんはいと思ふやうなり」という言葉を女大将は口にしたのではないだろうか。

(『在明の別』再考―家の存続と血の継承―、『継承と展開5』中古文学の形成と展開―中古から中世へ―)

〔和泉書院、一九九五年〕所収〕と指摘されている。

実際、太政大臣にとつて、左大臣と中宮はそれぞれ、弟の子供・弟の息子の子供で、父系を介した近親者に当たる。表向きは祖父と孫である太政大臣と左大臣・中宮との関係は、実質的にも、西本氏の言う「血の保証」に基づいて成り立っている。

また、中宮の実父である内大臣は、中務卿宮北の方の間にも「不義の子」をもうけており、『在明の別』には、中務卿宮女・中務卿宮・内大臣という、もう一組の「不義の子・表向きの父・実父」が存在する。



中務卿宮女―便宜上この名称を使用する―は中務卿宮北の方と内大臣との密通によつて誕生したのであるが、その出生の秘密は、表向きの父にも実父にも知られず、彼女の周辺で

も問題にされなかった。

ただし、中務卿宮女が内大臣の子であることを示唆する記述はあり、左大臣による垣間見の場面では、彼女の容貌が、中務卿宮には少しも似ておらず、どういふ訳か、左大臣の妹である中宮によく似ていると語られている。

女君十五六ばかりにて、いとらうたげなるさましたり。

「中つかさの宮の御むすめときゝしなるべし」とおぼすに、かの宮の御ことぞさらにみえぬ。思なしよそふべくもあらねど、いかにぞやみまほしきさまぞ、中宮にいとよくおぼえきこえる。

(巻二 鎌倉時代物語集成377頁)

この垣間見の後で中宮に対面した左大臣は、妹の容貌に中務卿宮女の面影を感じ取って、またもや不思議に思う。したがって、中務卿宮女と中宮は父親を同じくする異母姉妹であり、中務卿宮女が実は内大臣の子供であったと判る。

物語の享受者へは情報を提示する『在明の別』だが、中務卿宮女の出生の秘密は物語内部では誰にも発覚しない。しかしながら、表向きの父である中務卿宮が高野山に隠棲した後、残された彼女が「いとあはれにする人なくてたゞよ」(巻三 鎌倉時代物語集成436頁)「う羽目に陥ったため、母の姉に当たる承香殿女御(まへ)に引き取られることとなり、最終的には

血縁関係が明確な母方に帰属させられている。

この中務卿宮女は、単なる点景人物に過ぎず、物語にとつてさほど重要ではない登場人物の処遇をわざわざ明記する点に、『在明の別』が「不義の子」とその所属すべき「家」とを強く意識していたことが窺えよう。「不義の子」が表向きの父の子であり続ける、もしくは、表向きの父の家に所属し続けるには、「不義の子・表向きの父・実父」の間に父系を介した「血の保証」が必要なのである。

これは『在明の別』独自の設定ではなく、中世王朝物語においては、誕生した家に表向きの父の子供としてそのまま所属する「不義の子」に、同様の「血の保証」が付与されている例が多く見られる。次節では、『在明の別』以外の作品について、個々の事例を検証してみた。

#### 四

「不義の子」が登場する中世王朝物語は『在明の別』の他に、『今とりかへばや』、『いはでしのぶ』、『苔の衣』、『我身にたどる姫君』、『風に紅葉』、『海人の刈藻』、『夢の通ひ路物語』が現存している。

『今とりかへばや』

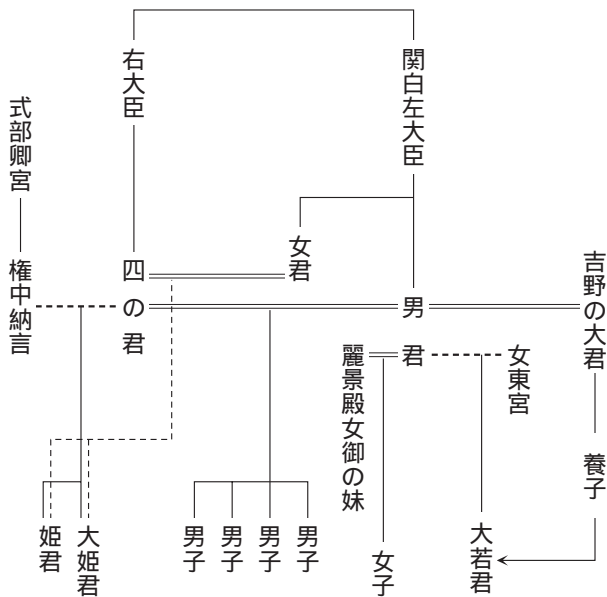
女君の男装時代に妻である四の君が権中納言との密通によってもうけた大姫君と姫君は、実父に引き取られることなく母の実家右大臣家で養育されていた。主人公兄妹が入れ替わった後、男君の子供を身籠もった四の君が、実家に娘を二人とも残して男君の自邸である二条殿へ移る時点では、

姫君たちを、なをかたはらいたければ具し聞え給はぬを、  
大將殿も、「なか。なを」なども聞え給はぬを、人の言

うことはそら事にはあらず、殿（右大臣）なども推し量り  
給ける。（巻四 新日本古典文学大系340～341頁）

とあるように、男君には世間的にも権中納言の子供と知られている娘たちの世話をするつもりがなかったようだが、女君所生の東宮が即位した際には、大姫君を女御として入内させている。

男君には女装を解いた後に麗景殿女御の妹との間に生まれた実の娘が一人おり、この娘は女君所生の二宮が立坊した際に女御となっている。実の娘が一人しかいないので、権中納言の娘ではあるが、自分の娘として大姫君を入内させたのであろう。天皇の外戚の座を手に入れるため、「不義の子」を自家の娘として入内させるという点では、『在明の別』によく似た処遇となっている。



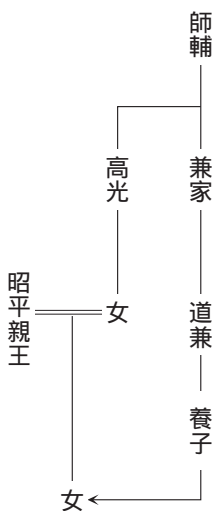
『在明の別』の中宮は実父が太政大臣家の近親者であるのに対し、『今とりかへばや』では大姫君の実父と男君とに近い血縁関係は認められないが、男君にとって四の君は父方の従姉に当たり、『栄花物語』には、藤原道兼が父方従姉妹藤原高光女の娘（昭平親王女）を養女にしたという次の記事が



ある。

九の宮（昭平親王）は、九条殿（師輔）の御子入道の少将多武峯の君（高光）と聞えし、童名はまちをさと聞えしが御女に住みたまへりける、いとつつくしき姫宮出でおはしましたりけるを、いと見捨てがたう思しけれど、世の中はかなかりければ、思し捨ててけるなりけり。この姫君（昭平親王女）、いみじうつくしつおはするを、粟田殿（道兼）、聞しめして、この宮を迎へたてまつりて、子にしたてまつりてかしづききこえたまふ…。

（巻第四みはてぬゆめ 新編日本古典文学全集 205  
〜206頁）



この後、道兼は養女昭平親王女に藤原公任を婿取りしており、『今とりかへばや』の男君と大姫君との関係は、道兼と昭平親王女との関係に似ている。

ただし、男君と四の君の間には四人の男子が誕生するが、

四の君が権中納言との間にもうけたのは女子のみである。男君は女東宮腹の大若君（若君）を嫡妻である吉野の大君の養子にしている。男君の嫡男として関白家の後継者となるのは大若君である。それでも、四の君と権中納言との密通によって男子が誕生させられないのは、家の継承や存続に関わる男子には他氏の血を入れないという意識の表れであろう。女君が、権中納言との間にもうけた宇治の若君を、男装時代の自分の子―表向きは、入れ替わり後の男君の子―として関白家に連れ帰ることをしなかったのも、同じ理由からなのかもしれない。

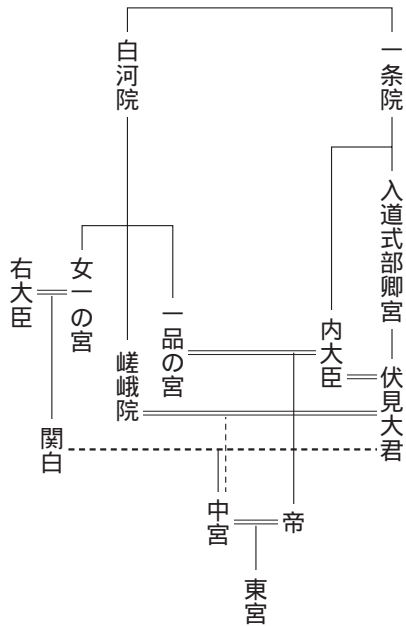
『いほでしのぶ』

『いほでしのぶ』は巻一・二以外を散逸しているが、抜書本などによって、巻三以降に描かれている中宮・嵯峨院・関白という「不義の子・表向きの父・実父」の様相を窺い知ることが出来る。

この「不義の子」である中宮の母は伏見大君で、彼女はまず、死期を悟った父入道式部卿宮によって内大臣に託されたのだが、内大臣はすでに白河院の一品の宮との結婚を許されて仲睦まじく暮らしており、伏見大君への訪れは間遠であつ

た。そこへ、懐妊中の一品の宮に伏見大君の亡き母の物怪が取り憑く騒ぎが起き、それを疎ましく思った内大臣は、伏見大君のもとへ全く通って来なくなった。内大臣の途絶えを嘆く伏見大君は、母方のおばである尚侍に会うために宮中へ赴き、そこで帝（後の嵯峨院）に見初められ、帝寵を受ける身となる。こうして一品の宮・内大臣夫妻と伏見大君・嵯峨院の関係を誤り伝えた噂が白河院の耳に入って怒りを買ひ、一品の宮は父院のもとへ連れ戻され、伏見大君は五条の家に退出した。その後、一品の宮との復縁が叶わなかった内大臣は悲嘆のうちに死去。

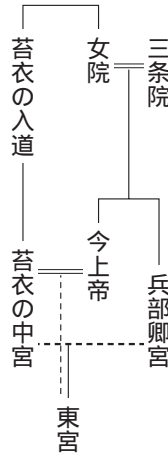
伏見大君は関白と逢瀬を持って身籠もったものの、尚侍として出仕する。彼女の懐妊と宮中への復帰時期とはどちらが先なのか、抜書本には記されていないので詳細は不明だが、何れにせよ出産は尚侍となった後のことで、この時生まれた中宮を帝の子と偽った。



皇女として育てられた中宮は、入内して立后するが、その出生の秘密は、後に、父親と偽られてきた嵯峨院の知るところとなった。中宮とその所生の東宮が自分の血を承けておらず、実は藤原氏である関白の血筋であったと知った嵯峨院は、伏見大君に向かって恨み言を述べる。関白は嵯峨院の甥なのだ、それは嵯峨院の姉であり関白の母である女一宮を介した続柄で、父系の系図においては藤原氏に属する。したがって、関白の娘である中宮も藤原氏出身ということになり、自身の血統を皇統に残したいと願っていた嵯峨院の望みは、潰えてしまった。

『苔の衣』

『苔の衣』は三世代に亘る物語で、次の系図に挙げた中で、苔衣の入道たちが第二世代、彼らの子供である苔衣の中宮たちが第三世代に属する。



幼くして母親と死別した苔衣の中宮は、父方の伯母である女院に引き取られ、兵部卿宮と兄妹のように育つ。女院の計らいにより、装着を済ませた中宮は、今上帝が東宮であった時に入内した。しかし、東宮女御となった後、共に育った彼女に思いを寄せていた兵部卿宮に忍び入られて懐妊し、生まれた男児を東宮の子と偽った。東宮の即位に伴い、その皇子が立坊するが、結局その出生の秘密は露見しないままに終わる。

兵部卿宮が今上帝と母を同じくする弟ではなかったとしたら、他の外戚の血が皇統に入ることになるが、この『苔の衣』の場合、血統に関しては、父方母方共に何の問題もない。

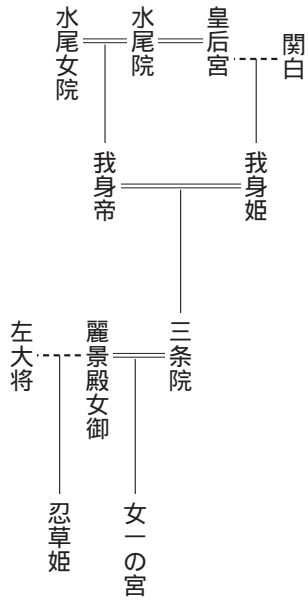
『我身にたどる姫君』

『我身にたどる姫君』には、后妃や内親王といった高貴な女性たちの密通が頻出し、四人の「不義の子」が登場する。后妃と臣下の男性との密通によって誕生したのが、我身姫・忍草姫・初草姫。内親王の密通によって誕生したのが、後涼殿中宮である。

この四人の内、我身姫と忍草姫は密かに出産され、成長した後後に、実母の名を隠したまま実父に引き取られている。

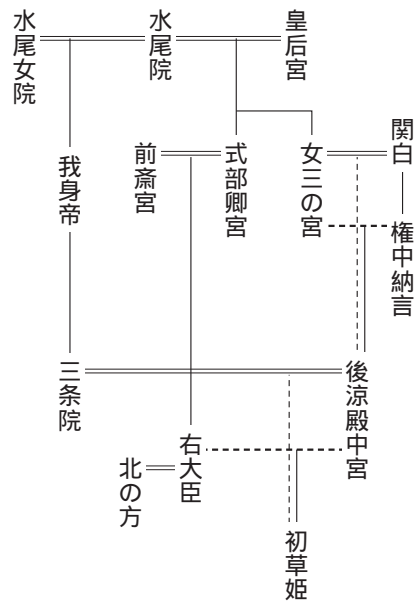
我身姫は、皇后宮が父院の服喪期間で里居していた時に闇白と密通したことによって誕生。自身の素性も知らされないまま、皇后宮の叔母である音羽尼上に養育され、後に実父に引き取られて入内し、女院となる。

忍草姫は、左大将と麗景殿女御との間に生まれた。里住み中に密通して忍草姫を出産した女御は、「知人のおつてで引き取った」と取り繕い、姫を手許に置く。その後、左大臣となった左大将は、娘の存在を知って自邸に迎えた。左大将は、我身帝と同母姉妹の女四の宮が関白の息権中納言に降嫁してもうけた子供なので、三条院の父方従兄弟ではあるが、皇女の息子で、本人の身分は臣下であるから、その娘を院の姫宮と偽ることは出来なかったのだらう。



皇后宮との間に我身姫をもつけた関白は、皇后宮の娘である女三の宮を水尾院に託され、妻に迎えた。しかし、関白の嫡男権中納言は、女三の宮が独身の頃から彼女に言い寄っており、関白へ降嫁した彼女に通じたことで、後涼殿中宮が誕生した。

関白の子として育った後涼殿中宮は、東宮（後の三条院）に見初められ入内したが、母である女三の宮同様、右大臣に近付かれて初草姫を産む。初草姫は皇女として育てられていたが、表向きの父である三条院の崩御後、実父右大臣が盗み出し、北の方腹の子供と偽って養育した。三条院の皇女は死去したと公表され、結果的に、皇女としての初草姫の存在は、抹消された。



後涼殿中宮の出生の秘密は露見せず、実父は表向きの父である関白の子息なので、中宮が関白家の子供として遇されることに血統上の問題はない。

初草姫の実父である右大臣は、三条院とは父方従兄弟同士という父系を介した近親関係にあり、両親とも皇族だが、あくまでも右大臣自身の身分は臣下なので、初草姫の血統は皇女に相応しくない。「我身にたどる姫君」の認識では、我身姫・忍草姫と同じく、初草姫も実父に引き取られるのが妥当なのだろう。

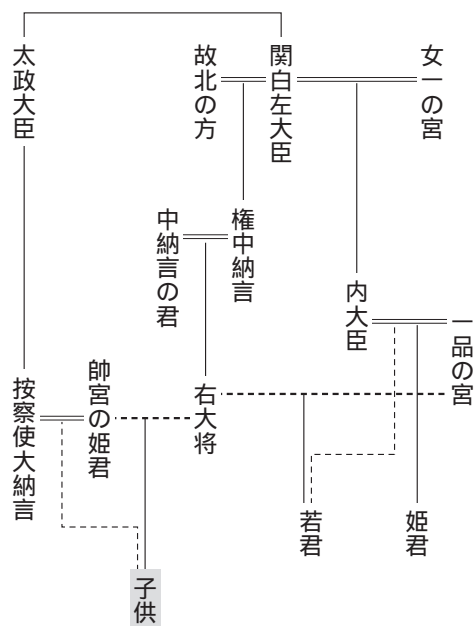
『風に紅葉』

家の後継者を獲得するために「不義の子」を求める。『在明の別』とは些か趣を異にするのだが、『風に紅葉』の内大臣は、妻である一品の宮と、自分の甥であり同性愛の相手でもある右大将との密通を手引きし、それによる一品の宮の懐妊も喜んで、「不義の子」の表向き父となる。

この内大臣の父である関白は、北の方との間に一児をもうけていたが、女一の宮を盗み出して以来、もとの北の方との息子をかえりみなくなつた。夫に見捨てられた北の方は、一人息子を心の拠り所としていたが、その息子は、十四歳で権中納言に昇進した翌年、突然亡くなつたため、悲嘆に暮れた北の方も後を追うように世を去る。二人の死後、権中納言に仕えていた中納言の君が、関白家側に知られず右大将を出産するも、程なく死去。長じて権中納言の遺児だと名乗り出た右大将は、関白家に引き取られ、世間には関白の子と公表された。

唐土から渡つて来た聖に、大きな災いが降りかかると警告された内大臣は、その聖の勧めによつて加行をすることとなり、その加行中、一品の宮の徒然を慰めさせようと、右大将を彼女のもとへ導く。右大将と密通させられた一品の宮は、内大臣を恨み、右大将の子である男児を出産した際に死去。

それが原因で世をはかなんだ内大臣は、官職を返上してしまう。一品の宮と右大将との間に誕生した若君は、実父である右大将に酷似しているのだが、もともと内大臣と右大将とが瓜二つなので、誰も若君の出生に疑念を抱かない。



内大臣にとつて右大将は、異母兄権中納言の息子で、父系甥に当たる。父の死後に名乗り出て、世間には内大臣の弟と公表されていたこともあり、父系重視という点では、右大将の子である若君が、内大臣の子として遇されることに何の問

題もない。

また、関白の兄太政大臣の息子である按察使大納言は、右大将の子供を身籠もった帥宮の姫君を盗み出し、胎児の実父が誰なのかを承知の上で、自分の子供であるかのように振る舞う。この場合、帥宮の姫君が産むはずの子供は、いわゆる「不義の子」には該当しないが、実父の右大将は表向きの方である按察使大納言にとつて父方従兄弟の息子なので、これも父系重視という点では問題ない。

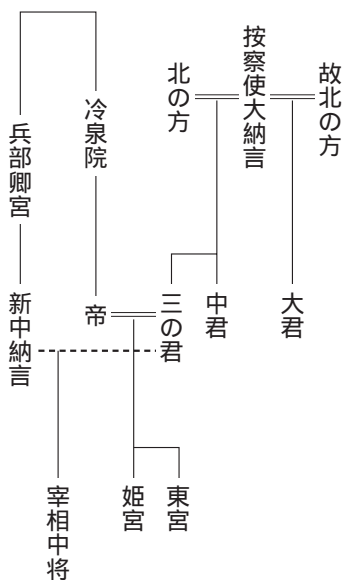
### 『海人の刈藻』

平安末期から鎌倉初期にかけて成立したと推定される原作本は散逸。現存する改作本は『風葉和歌集』以降の成立らしく、按察使大納言の三人の娘と、彼女たちを取り巻く男性たちを中心とした人間模様が繰り広げられている。

按察使大納言の三の君は女御として入内していたのだが、宮中で彼女の姿を垣間見た新中納言が恋慕の情を抱き、病臥した大納言を見舞うために里下がりした三の君のもとへ侵入する。それによって三の君は懐妊。事情を知る姉たちの画策で事は秘密裏に運ばれ、生まれた子供は新中納言が実母の名を伏せたまま引き取った。その後、中宮となった三の君は、東宮・姫宮を出産。新中納言は権大納言に昇進するも出家し、

即身成仏を遂げる。

宰相中将は実母が誰なのかを知らされずに成長したが、相手が異父妹とは知らずに三の君腹の姫宮の降嫁を望んだため、それを断念せよと、三の君の姉中君が出生の秘密を打ち明けた。

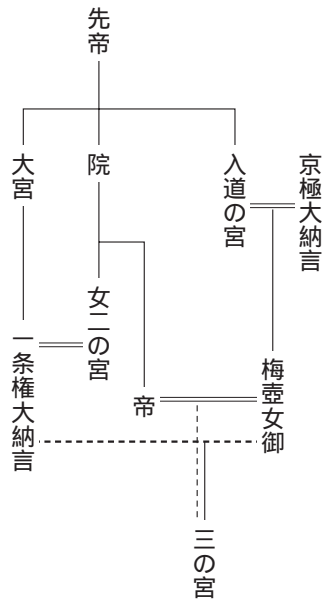


新中納言は兵部卿宮の子息であるから、帝とは父系を介した従兄弟同士だが、その身分はあくまでも臣下なので、その子供を皇子と偽ることは出来ないのであろう。『我身にたどる姫君』の初草姫君の事例同様、ここでもやはり、皇族と臣下との厳密な区別が付けられている。

『夢の通ひ路物語』

吉野で古い陵に仕える聖の夢に、その頃亡くなった一条権大納言が現れて、三の宮に密かに見せて欲しいと巻物を渡す。その巻物はある物語が書き付けられたもので、そこには一条権大納言と梅壺女御との悲恋と、それにまつわる三の宮の出生の秘密も記されていた。

一条権大納言は、京極大納言の三の君と文を交わしていたが、院の女二の宮と結婚させられる。三の君も、寵愛していた藤壺女御に先立たれた帝が、故人によく似た彼女の入内を望んだため、一条権大納言の子を身籠もったまま、梅壺女御となった。こうして誕生した三の宮は、帝の鍾愛の皇子として育つ。やがて、一条権大納言は病死し、梅壺女御も出家した。三の宮が十一歳になった年に、吉野の聖は、一条権大納言から託された巻物を見せる。自分の実父が一条権大納言であることを知った三の宮は、臣籍降下を望むが、宮を寵愛する帝がそれを許可しないまま、『夢の通ひ路物語』は幕を閉じる。帝は、三の宮の容貌が実父に酷似していることから、うすうす事情を察するのだが、父親として長年注いだ愛情ゆえに咎めない。愛情よりも血統を重んじた『いはでしのぶ』の嵯峨院とは対照的な親の情が、『夢の通ひ路物語』には存在するのである。



一条権大納言は、帝にとって父方従兄弟に当たるとはいえ、皇女の息子で、あくまでも臣下の男性であるから、その子供が血統を偽り皇族のままであることを容認されるという設定は、特異なものと言わざるをえない。

前に挙げた『いはでしのぶ』の中宮も、実父である関白は皇女の息子であったが、事実を知った表向きは父嵯峨院は、中宮を藤原氏の娘と見なした。『我身にたどる姫君』においても、初草姫の実父は式部卿宮と前斎宮との間に生まれた右大臣であったにもかかわらず、初草姫は天皇家から連れ出され、皇女としての彼女の存在は消されている。

出生の秘密を知った三の宮は、自分の境遇を、「我国と成ては、冷泉院のうへなんどより外もなし、それも、おなじ院

の御子にこそおわしけれ、かく引きたがへたる身や有」(巻六 鎌倉時代物語集成284頁)と、『源氏物語』の冷泉帝と比較して嘆いており、確かに、中世王朝物語においても特異な身の上ではある。ここに挙げた八作品の中で最も成立年代が下ると推定される『夢の通い路物語』の時代には、厳密であつた規制も緩まっていたのであろうか。

ところで、冷泉帝と三の宮との違いは、実父と表向きの父との血縁関係の近さだけではない。両者の最大の相違点は、即位の有無であらう。『源氏物語』では、臣籍に下つた源氏の息子である冷泉帝が、在位中には皇子に恵まれず、一代限りでその血筋が皇統から途絶えたとはいえ、即位した。それに対して、『夢の通い路物語』では、三の宮を立坊させる心積もりでいた帝が、宮は自分の子ではないのだらうと気付いき、血統を偽つた皇子の即位という禁忌を犯す危険は回避されると思われる。

\*

以上の中世王朝物語に見える「不義の子・表向きの父・実父」の関係を整理すると、次表のようになる。

	今とりかへばや	在明の別	いはでしのが	苔の衣	我身にたどる 姫君	風に紅葉	海人の刈藻	夢の通い路物語
子供	大姫君 姫君	左大臣 中宮	中宮 中務卿宮女	東宮	我身姫 後涼殿中宮	初草姫 忍草姫	宰相中将	三宮
表向きの父	女君	主人公	中務卿宮	今上帝	関白	三条院	帝	帝
実父	権中納言 権中納言	関白	内大臣	兵部卿宮	権中納言	右大将	新中納言	一条 権大納言
表向きの父と 実父との関係	不明	父方叔父ノ弟	父方従兄弟(おじ の子ノ父系甥)	同母弟	息子	父方従兄弟(おじ の子)	父方従兄弟(おじ の子ノ父方従兄 弟(おじの子)の 息子	父方従兄弟(おば の子)
表向きの父に 露見の有無	有	有	有	無	無	無	有	有

「表向きの父と実父との関係」は、表向きの父にとって実父がどういう続柄になるのかを示した。『在明の別』では、家の後嗣を獲得する主体である太政大臣と子供の実父との続柄も並記し、また、『風に紅葉』の右大将と按察使大納言との実際の続柄も同様に示した。物語中では誕生が描かれなかつた子供は、「子供」と示した。



三・四に挙げた中世王朝物語における「不義の子」たちの処遇には、『夢の通ひ路物語』を唯一の例外として、表向きの父と実父との血縁関係による明確な違いがある。

表向きの父と実父とが父系を介した近親者ではない場合は、表向きの父に事実が露見し、実子としては遇されない。事実が露見しなかつた場合も、子供は表向きの父の家には留まらず母方に引き取られ、父系の血統を偽つたまま何の破綻も来すことなく他家に所屬し続けることは出来ない。

表向きの父が帝であつた場合、帝と実父とが父系を介した血縁者であつたとしても、実父が臣下の男性ならば、その子供は、出生を偽り皇子皇女となつても、何らかの形で破綻が生じ、平穩なまま皇統に連なり続けることが出来ない。母親が懐妊を隠して密かに出産すれば、子供はやがて実父に引き取られ父方で養育される。

「不義の子」であるという事実が露見しない、もしくは露見しても容認されて、表向きの父の子供としてその家に収まることが出来るのは、表向きの父と実父とが父系を介した近親者である場合のみとなっている。

この破綻を招かない表向きの父と「不義の子」との関係は、

実子ではない者を自分の子供として遇するという点で養子を迎えることと似ており、『在明の別』『我身にたどる姫君』『風に紅葉』には実際に行われた養子縁組に相当する関係が含まれている。

高橋秀樹氏によると、一条朝から土御門朝まで(九八六—一二一〇年)の貴族社会における養子関係は、次のような条件を備えていた。

少なくとも『公卿補任』『栄花物語』には父系を介さない母方のオジ—オイ—イトコ間の養子関係は見られない。(中略)

同姓・異姓の問題は、藤原氏が貴族層の大勢を占めている上に、父方親族の養子となることがほとんどであるため、圧倒的に同姓養子が多い。異姓養子は、嫡妻が庶妻を養子とした一例、妻の親族を養子とした二例(うち一例は養子の子である)、勅命による特例など例外的にしか行われておらず、『公卿補任』『栄花物語』に見える貴族層の場合、男子のない場合に異姓の男子を養子として「家」を継がせるといったことは見られない。

養親と養子との世代規制はまったくない。その続柄は、父方の祖父と孫、同じくオジとオイ、兄弟関係がその大部分であり、血縁関係がかなり重視され、近親間での養

子関係の設定が一般的であったことを知り得る。

（「平安貴族社会における養子について」『風俗』二十八

巻四号、一九八九年）

『在明の別』の主人公（もしくは、太政大臣）と左大臣・

中宮、『我身にたどる姫君』の関白と後涼殿中宮、『風に紅葉

の内大臣と若君、按察使大納言と帥宮の姫君が懐妊中の子供、

それぞれの関係は、この養親と養子との続柄にほぼ当ては

まる。つまり、密通によって誕生した「不義の子」が、表向

きの父の子供として遇され続けるのは、表向きの父の養子と

しても相応しい条件を備えている場合なのである。

更に言えば、これらの養子に相応しい「不義の子」たちは

全て、『夜の寢覚』のまさこ君と同様に、摂関家の系図の中

に収められている。

『夜の寢覚』では、関白職が、内大臣の父 老関白 内大

臣の順に受け継がれたと思われ、この三人が摂関家の構成員

である以上、内大臣を実父とするまさこ君が老関白の息子と

して遇されても、摂関家の継承に他家の血筋が入ることに

ならない。

これと同じように、父から息子へ関白職が受け継がれる

『我身にたどる姫君』は言うまでもなく、『在明の別』の関白

は兄太政大臣から関白職を移譲されているし、『風に紅葉』

でも、右大将は内大臣の遁世により関白家の後継者となるはずであり、また、内大臣の父関白の兄であり按察使大納言の父である太政大臣は弟から一時的に関白職を譲られている。何れも、子供・表向きの父・実父が皆、摂関家の系図の中に収められているのである。

このように、「不義の子」たちの処遇は、明らかに父系の血統を重視して行われている。「不義の子」であるという事実が、表向きの父に露見しないまま、或いは露見しても容認されるのは、表向きの父の子供としてその家に留まることが出来るのは、家の継承に関わる者として血統上何の問題もない子供であり、その場合、子供・表向きの父・実父は、父系を中心とした家系図の中に収まるように配置されている。密通を頻出させる中世王朝物語ではあるが、その結果誕生した「不義の子」の処遇に関しては、あくまでも父方の血統を重んじた一定の規制が存在するのである。

#### 注

注1

狭衣と女二の宮との間に誕生した子供を自分が産んだ皇子であると偽り、その即位を願った『狭衣物語』の皇太后宮の事例に、神田龍身氏は、「自派の伸張のためには、他の血が皇統に流れこまうと知ったことではない」というたかな認識」を読み取っておられる（同氏前掲論文）。

しかし、たとえ皇太后宮の意図がそのようなものであったとしても、物語はそれを是としない。

「承香殿女御」という呼称が用いられるのは、この女御が中務卿宮女を引き取った時だけである。

そのころげむじの入道をとらうせ給ぬ。中つかさの宮はあはれにおぼしなげきて、かうやのやまにこもり給にき。そのかたにいとたうとくをはしける御こにて、のちのよたのもしげなり。かのひめ君ぞ、いとあはれにしる人なくてたゞよひ給を、しよきやうでんときこえし女御の君、むかへよせ給て、御つれぐのなぐさめにもてかしつき給。

(巻三 鎌倉時代物語集成436頁)

つまり、中務卿宮北の方の姉に当たる女御を「承香殿女御」と呼ぶ箇所は、物語本文中には他に見当たらないのであるが、中務卿宮の母女御はすでに死去しており、中務卿宮女の縁者に該当する女御は母親の姉のみなので、ここに登場する「承香殿女御」を中務卿宮女の伯母と判断した。

男君と女東宮との関係は公に出来るものではないので、大若君も厳密に言えば「不義の子」に該当するのかもしれないが、女東宮には「不義の子」の「表向き」の父となり得る配偶者がおらず、また、大若君は誕生直後に男君に引き取られて関白家の子供として養育されており、未婚皇女が産した子供を母后所生の皇子と偽った「狭衣物語」とも趣を異にする。

よって、本稿では大若君の事例を扱わないことにした。

高橋秀樹氏が『公卿補任』から養子の例を抽出して作成された資料(同氏前掲論文)により、それぞれの続柄と同様の養親養子関係が一条朝、土御門朝に幾例あるのかを確認した。

『在明の別』の事例を照合すると、太政大臣―左大臣のように

父系甥を養子にしたものは五例。太政大臣―中宮の兄弟男系孫(『風』に紅葉)の内大臣と若君も同じ)、二例。主人公―左大臣の父系従兄弟、二例。『我身にたどる姫君』の関白―後涼殿中宮の男系孫は六例。

『在明の別』の主人公にとって中宮は父系従兄弟の子、『風』に紅葉の按察使大納言にとつても帥宮の姫君の胎内に宿っている右大将の子供は父系従兄弟の子(実際には、「父系従兄弟の男系孫」)で、やや遠い間柄になり、同様の養子関係は見えないが、より遠い父系ハトコとの養子関係が一例あるので、これらも血縁関係を無視しているとは言えない。

〔付記〕本稿は、第五十回西日本国語国文学会(於 鹿児島大学、二〇〇〇年)における口頭発表に基づくものです。今日まで御教示を賜りました方々に、厚く御礼申し上げます。

(みやざき ゆうこ・国立国会図書館非常勤職員)

注2

注3

注4